

趣旨説明  
Background of the Symposium

増田 和也 (高知大学)

MASUDA Kazuya (Kochi University)

マングローブ林は熱帯・亜熱帯の沿岸や汽水域に形成される。マングローブ林は周辺に暮らす人びとに、建材や薪炭材、タンニンや薬の原料などさまざまな資源をもたらしてきた。また、マングローブ林が形成される塩性湿地は、エビやカニ、小魚といった魚介類の生息空間でもあり、豊かな漁場となってきた。このようにマングローブ林は古くから人間に利用されてきたが、近年では生物多様性、海岸侵食低減効果、さらには炭素貯留の観点からも、その機能が注目されている。

一方、世界中でマングローブ林面積は、人間の利用により、この数十年で半分程度に減少しており、その消失はインドネシアでも同様の傾向にある。そうしたなかで、マングローブ林の保全や再生に向けた取り組みが、官民のさまざまなレベルで行われている。インドネシアでは、2020年大統領令を受けて泥炭復興庁が泥炭・マングローブ復興庁となり、取り組みの幅を広げているところでもある。

こうしたマングローブ林について、今回のシンポジウムでは「はざま」という観点から取り上げてみたい。それでは、マングローブ林に関する「はざま」とは何か。

まずは、境域ともいえる空間としての「はざま」である。マングローブ林は陸域と海域の「はざま」に広がり、その立地こそがマングローブ林の豊かな資源の源泉でもある。しかし、制度の上ではマングローブ林は森林、つまり陸域として扱われ、水産資源や海洋生態系の観点から議論される場合には、「はざま」ゆえの問題をはらんでいる。

また、マングローブ林がもたらす資源には地域社会内で消費されるものがある一方で、国境を超えて交易されるものもある。さらには、近年のマングローブ林保全を目指す枠組みは、政府レベルや国際機関など、地域を離れた場で議論・策定され、外部主導で推進される傾向にある。そこでは、マングローブ林はローカルとグローバルがつながったり、あるいは相克を生み出したりする「はざま」としても浮かび上がる。

もう一つ本シンポジウムで考えてみたいのが、「利用」と「保全」という問題である。この2つは相反するものなのか、あるいは双方の「はざま」で両立することは可能なのか。

こうした問題関心のもと、マングローブの利用と保全をめぐる歴史をたどりながら、マングローブ林周辺で暮らす人びとやマングローブ再生に取り組む実践者の視点から、マングローブ林のこれからについて考えていきたい。